

現代日本の公共図書館における場の性質と役割

高嶋和花

近年、日本の公共図書館にとって場は重要な要素となった。日本の公共図書館は、学生の勉強部屋図書館(1950年代)、貸出型図書館時代(1960～70年代)、多様化・ネットワーク化の時代(1980年代)を経て、館内で読書や多様な図書館サービスを楽しむことのできる滞在型図書館へと変化したとされ、最近の調査では平均滞在時間が長時間化していることが明らかになっている。一部の自治体では図書館を交流の場と位置付け、図書館のサービスを通して地域活性化を図るなど、図書館の場を中心とした機能の展開が見られる。しかし、現代日本の公共図書館の場が持つ性質と役割の全体像はいまだ解明されていない。

本研究の目的は、現代の日本における公共図書館の場に関する性質と役割を網羅的に明らかにし、類型化を行うことである。類型化を行うことでより場としての性質と役割の特徴が明らかになり、今後の日本の公共図書館の場に関する議論に貢献できる。研究課題として、(1)現代日本の公共図書館の場の性質と役割にはどのようなものがあるか、(2)場の性質と役割の観点からみた場合、現代日本の公共図書館にはどのような類型があるか、を設定した。

研究方法は、2010年以降に開館・現用館の竣工を行った公共図書館の計画に関する資料を対象とした質的内容分析である。分析対象の図書館は487館で、そのうち資料を収集できたのは128館だった。この128館の資料を対象に質的分析ソフトウェアMAXQDA2020を用いて場に関連する記述にコード付与した。その後、コードを基礎にクラスタ分析を行うことで、分析対象とした公共図書館を類型化した。

研究の結果、合計で5,581件のコードが得られた。このコードをグループ化することで、「施設・サービスの利用促進」、「地域のコミュニティ形成に寄与」、「地域づくりの場」、「情報の提供と利用促進」、「教育学習の場」、「研究支援」、「より良い読書活動のための支援」、「空間整備による利用者ニーズへの対応」、「地域の産業的な発展に寄与」、「利用者の文化的・知的・精神的発達」、「社会的弱者への支援」、「市民活動の支援」、「民主主義の基盤」の13のコード群が次元として浮かび上がった。この13次元ベクトルで表される特徴量を持ったデータに基づいてクラスタ分析することで、分析対象の公共図書館を分類した。結果として、「基本型類型」、「高機能型類型」、「地域寄与型類型」、「情報指向型類型」、「市民支援型類型」、「無特徴型類型」の6つの類型とその特徴が得られた。

以上の結果から、現代の日本の公共図書館の場が持つ代表的な性質は「地域のコミュニティ形成に寄与」と「空間整備による利用者ニーズへの対応」であることが解明された。本研究に残された課題は、場としての性質と役割が実際の図書館でどのように作用しているのかを利用者の視点から明らかにすることである。

(指導教員 小泉公乃)